

弟の祥月命日に帰省・お参りの機会がなかったので、仕事も一段落した月遅れの今月下旬週末を利用して、鹿児島に帰ってお墓参りをし、老いた両親の状況を確認した。

聞きつけてというより呼び出したところという方が正確であるが、すぐ近くに住む従兄弟半（小生の従兄弟の子）の防大の1期後輩が焼酎を持ってたずねてきた。

田舎に住んでいると同等のレベルで話の出来る相手に恵まれずにストレスが溜まっているのか、機関銃の如くにすっかり昔帰りした（最も彼の場合は小生と違って鹿児島弁が抜けなかったので、昔帰りではなく、本来の状態？）薩摩弁で、色々な話を話し始めた。

かつては子供達で賑わっていた吾等が故郷も、今は年老いた者が大多数を占める典型的な農村社会になってしまっている。その様な中に自衛隊を退官し、田舎に骨を埋める決意で行政書士として自営を始めた彼を、地域の人々は温かく、そして何よりも頼りになる存在として歓迎した。



(実家近くから桜島を望む)

小学校校区及び集落の世話役として八面六臂の活躍である。聞けば十指に余る役職を引き受けている。町内会長、社会福祉協議会、農協、消防団、隊友会や防衛協会等々である。その殆んどがボランティアである。報酬は地域の皆の笑顔とお礼にと届けてくれる野菜等である。田舎なるが故に生活費はさほどではなく、また近所の人々が届けてくれる野菜や果物で、十分過ぎるという。

昔ながらの慣習が全ての行動原理である田舎にあって、正論を言う事も難しさもあるようだ。ナアナアで済ませて波風を立てないというのも一つの処世ではあるが、それではこの地域の発展もありえない、我が集落近くまで、団地が進出して団地の所謂都会的な考えと、どちらかと言うと陋習にも近い前近代的な住民の混在する地域となった現在ではそれでは対応し得ないという彼の論理も説得力がある。小生も納得である。

言うべきは、どしどし言うべきである。それが地域の活性化に繋がる。

また、このような話もしてくれた。彼は地域の成人教育部長を拝命しており、各種の講演・研修を企画実行する立場にある。社会・地域教育の重要性を小学校の教頭に依頼に行った際に、童話や部落問題も計画して欲しいと言われてなぜその様な話をする必要があるのか、それよりは今喫緊の課題は地域社会が如何にして地域の子供達を育てるかという事の筈であると堂々と己の信念・主張を述べて、結果教頭は素晴らしい話をしてくれたと言う。

学級が一つしか違わない彼と話していると小生が既に忘れていた小学生時代を思い出させてくれる。小学校卒業前に学校裏手の陣ヶ丘に全学年登り、小生が全校生徒を前に、将来は西郷大南州の様な人間になるのだと演説をぶつたと言っていたが、・・・真偽の程如何？

彼の既になくなった父親には、小生が防衛大の学生の頃帰省する度に、お邪魔しては安全保障問題を議論したり、人生論を聞いたりしたものである。議論しながら焼酎を飲み、或いはナンコを延々と夜が白むまでやったものである。県会議員までやった彼の父親は豪快な人であった。彼や父親らと飲むと最後にはその話になる。

彼の父親からは、輝男（小生）か史人（後輩の彼）かが帰ってきて地域の為に尽くせと耳にタコが出来るほど、諭されもし、強要も（？）された。彼が帰ってきて地域になくはならぬ存在として頑張ってくれているから、約束を果たせたので、ある意味では小生も一安心である。

田舎に帰ってくると一気に昔帰りするようだ。帰るべき故郷があるという事は素晴らしい事なのかもしれない。朝な夕なに眺めた桜島の頂上部分が昔ながらに我々を迎えてくれる。帰ってきたのだという実感が湧く瞬間である。

自衛官の息子なるがゆえに転校を繰り返していた息子から「僕の故郷は何処？」と聞かれて返答に窮したことがあったが、転勤族の子供達はある意味では可愛そうなのかも知れぬ。勿論、一方では沢山の友達や故郷を持つと言うメリットもあるのだろうが・・・。

時にはゆったりと時間の流れる故郷に帰って、昔の自分を思い出してみることも益ない事ではない。

それにしても静かである。都会の喧騒の中に身を置いているとこの静けさが得も言われず嬉しい。

そうこうする内に別の従姉が立ち寄ってくれる。

田舎は今でも濃厚な地縁血縁で結ばれている。